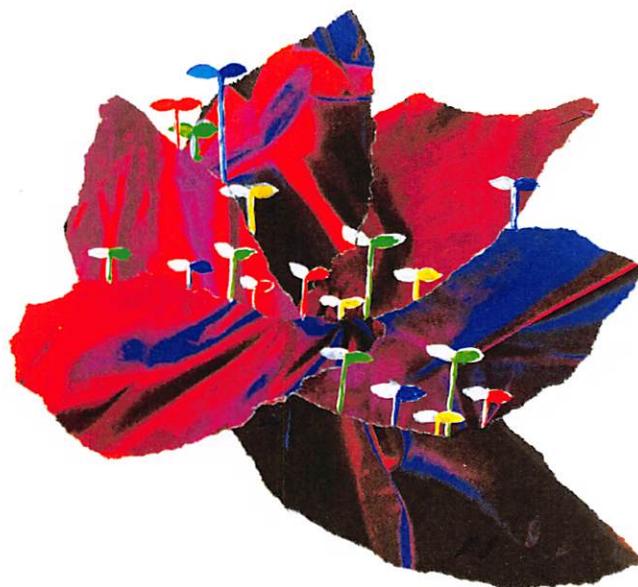


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 4



令和5年4月1日発行(毎月1回1日発行)第71巻第4号

No.779

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二三年 四月号 (通巻七七九号)

## ■歌壇月旦

折野浩一デビュー二十五周年

玉井綾子

◇今月の二十首詠……すこし華やかに

柴田登志恵 2

送風塔

さとうちえこ 46

■作品[A]

梅本武義・大浪美雪他

脇田智子他

磯田ひさ子歌集『ヒヤシンス』を読む会・記録 中島央子 47

A C B A

A

C

B

■オリーブ集

秋山真理子他

宍戸千佳子他

辻田聰美・富田鈴子他 38 72 48 18

◇今月の二人

藤井君康・島澤博子 14

私と短歌との出会い (248)

酒井治子 17

■〈第一歌集を読む〉 1

最近の歌誌より

〔編集部〕

中島義雄歌集『銀箱日記』—湿った抽象— 石田明彦

引用歌には万全の注意を

■遊覧寄港 〈あとは寝るだけの時間〉 江尻リエ子 45

今月の二人・作品評

久我田鶴子 16

関根和美

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子 36

クリップ……88 神田通信……表3

# すこし華やかに

柴田登志恵

昭和二十九年生まれ  
天平グループ所属

タグボート外国文字の貨物船ゆつくりゆつくり曳き帰り来つ  
 わが家からゆきたき願ひかなへにし母を八十島の海へ葬りぬ  
 渡りの途に尽くるもあらむ背黒鷗風あたたかき海ひくく飛ぶ  
 爭ひの国から帰りし背黒鷗やはらかな胸にみなも押しゆく  
 帰り来しのちのしまらく荒ぶりぬ背黒鷗の渡りの記憶

背黒鷗のはばたき強く跳ね橋を音たて揺らし真中にとまる

空海のはなだの色のつらなりに光かけゆき水平線みゆ

紀伊水道と真向かふ街の海滨はゆるやかに大洋へひらかれてゐる

まどかなる湾の対岸の街並のにび色さらでも深まりゆきぬ  
タワービルあまた立ちかる大阪は異物排除の突起持つらし  
真闇な絶対孤独の虚空なぞ認めざらなむ都市発光す

ぎんいろの木犀寒にかをりたつ夕暮れちかく雨のふりそむ

夕暮れの街にただよふたこ焼きの匂ひがいよよ人呼ぶならむ

暗渠からちと耳いだし金茶猫霜ふみ餌場へましぐらにゆく

薄玻璃の窓のへだつる温度差に猫の分断あきらかとなる

父母の旅立ちし家の坪庭に青きもの生る日差しまぶしき

日だまりに病理検査の結果聞く背の翼のひろがる気配

帆をたたみ眠るヨットの上をゆく背黒鷗のかがやき白し

この度が最後となります ありがとうございます 雛の飾りはすこし華やかに

おそらくは林檎果つるまで太陽の香りほのかに青きままなり

# 作品 A

梅本武義

顔の裏側

・羊

裏山を越えて旋回空港へ騒音もどるにほっとするとは  
感染をしたと気軽に言うが増え氣兼ねをせずに仲間入りする  
カレンダーに多き記入は通院日健康に見える顔の裏側  
切ると言う息子に命乞いをする視界さえぎるわが植えし樹の  
棒を持ち追えれば逃げ込む農水路冬は流れず狸の通路  
首都圏の強盗のニュース見るに付け猪歩く里の安心  
ウクライナを思いつつ見る物置きに残し置きたる炬燵火鉢を

大浪美雪

紙垂

・森

板碑のみのお宮に真白き紙垂張られ守れる人のをるに気付きぬ  
ブルーシートはづせぬままの家あると寿ぐ言葉のなき年賀状  
七草の材はなきかと目をこらす なづなはこべら小さきを摘みぬ  
寒中の真昼の電車に人をらずつらうつらと川を越えゆく  
柿の葉は柿の木のもと枇杷の葉は枇杷の根元に塚をばなせり  
冷えこみの厳しき朝風花と手を出す先に白梅ひとつ  
霜枯れの烟の一角延べ敷ける母はその葉紅に染む

奥田陽子

休み所

・羊

寺院へと登る細路もうここは寺領かちさき花の咲きいて  
鳥の声に自覺めし朝人もわれも丁寧に為すひとつひとつを  
黄金色の見事ならんと口ぐちに銀杏の大樹仰ぐこの朝  
さえすりに惹かれ来たれる境内の湧水の池水の藻さやか  
〈鳥たちの休み所〉と掲げいる池の中なる雑木林は  
其処此処の湧きくる水にうるおいて小さき魚の影さえも見す  
池のむこうに木のベンチ見え時おりを誰かしら来てしばらく休む

小野雅子

花言葉

・羊

十二月二十九日の誕生花カトレアと聞き少し羨む  
佳子さまはこの日の生まれおのづからその身も花も気品ただよふ  
佳子さまの生まれしことを病院で香川進と話して大晦日  
「女の子でよかつたなあ」 しみじみと香川進の声よみがへる  
年賀状のやりとりだけで会話する去年の返事は今年に書きて  
一月に半袖を着る五回目のワクチン接種受けに行くため  
調教師がるて騎手がるて自分では走りたくない馬かもしけず

磯田ひさ子 紅梅

・森

菊地栄子 エプロン

・海

松を過ぎ霜にうたれし万両の赤き実さらに色を深める  
さきかけは紅梅の花たっぷりと咲きたりあかあか心を照らす  
白梅の豆粒ほどのつぼみ堅し内へ内へといまだよろひぬ  
母上に代はり賀状を書きくくれし人のけなげさに憤り来る  
老いしこと認知症になりしこと恥づるにあらず隠すにあらず  
紅梅の花の明かりに吸ひ込まれ共に黙しぬ長く仰ぎし  
向島百花園にひとり来て紅梅の下ひとりを想ふ

市原やよひ

七草粥

・萬

限界の介護だったと慰めて面会出来ぬ夫愛しめり  
神様のくれた休みと言いくれし人の言葉を胸に温む  
車椅子押していた手が搜して冷たき空氣を掴まえながら  
パック詰めの七草貰いて易易と粥炊いて一月七日  
大根を雪の中より掘り出して母の作りし七草粥は  
水底に落ち葉敷き詰め透明な公園の池ただ静かにて  
新しきもぐら塚なり整然と空地にありて春の予兆か

神田鈴子 雪

・大

草刈十郎

冬将軍

・世

年賀状の途絶えしひとと思ひゐる松の内過ぎ凍る冬空  
カーテンを開けば一面しろじると今年初めの銀世界なり  
列島を覆ふ寒気がひと夜経て津々浦々に雪景色生む  
記録的な雪は交通麻痺を呼び列車を降りて歩む人ひと  
ただひとりの甥の結婚聞きとき亡母の喜ぶ顔が浮かび来  
待ちゐたる弟夫婦のよろこびはいかばかりならむ八十路を越えて  
日ざしやや伸びたる部屋にひかり満ち縁のシクラメン春をよろこぶ

いかほどの今朝の寒さや軒下の蜘蛛の網みながら畳ますに去る  
間違なく打ちたるはずの青きアザタベ灯火に駆をさらす  
わたくしに何の暗示ぞ外つ國の丘の黄の花よみがえらせ  
あかつきを聞こゆる声は尉<sup>トキワ</sup>鶴カナメの枝越し番が動く  
晴れたるも樹木を騒がす風のあり修理に持ちゆくエプロン重し  
一本と言う間もあらずスプーン二種差し出されおりケーキひとつに  
この耳を澄ませば聞こえ来るようにならたの素顔もまさやかに顕つ

北山雪男

遠翰む文

・伊

拝復以下書きあぐねをり「余命あと三月」と宣告されたるひとに  
出逢ひしは四十年前たまさかに同じ職場の貉となりて  
転勤願ひ書きたる夕べ彼去りて後の職場に竹光折られ  
満州生まれと戦後生まれがこもこもに語る歴史の時差のこぼこ  
組織諾ふ彼を呑みし夜のありき引くに引けざる激論の果て  
あな悔し 見舞ひかなはぬコロナ禍は短き文を繰り返し読み  
遠翰む手書きの手紙 老人性白内障の目にまさびしく

海渡り今年も來たる冬将軍致被害者は還り来たらず  
熱爛に代々つなぐ縁ありて人ははかなきこの世に生きる  
日向ぼこ孤独をいつか忘ること身も心をも温めるなり  
海原と島々染めし夕日かな釣瓶落しのしばしの間  
冬蜂の巣に抱きつきて動かざる日差しの弱き庵屋の軒  
不況の波寄せれど街は商戦とふいくさの最中轍はためく  
振り返ることばかりなる十一月この一年のわれの道のり

國井節子 青春

・春

近藤芳仙

雨晴海岸

・信

不意にくる胸ぐるしさに利く薬持つてたるだけで心安らぐ  
新春のマラソン大会足長き少女は走る青春を賭けて  
長き耳持つ故兎は遠山の風を恋ふのか小屋を抜け出し  
けもの道かき分け進む地下足袋の父の背中が道するべなる  
ま白なるヴェール展ぐるそば畠わづかの風にさわさわさわぐ  
目も足も如意なれども口だけはいよいよ達者な歩く会メンバー  
ハンドルを夫と互みに握る旅岬の果てまで夕日を追ひて

河野繁子 福寿草

・雁

坂上直美 夢想

・天

凍て土に咲き初めたる福寿草雪をかむりて闇からの声  
一、二月雪を被りて溶けるたびさりげなく居て陽にひらく花  
日脚のび異なる位置すれ櫛山の芽吹きとまがうグリーンフラッシュ  
人見知りの商人なりし道へりの石に腰掛け休める姫  
「理不尽に叱る母さん、父さんが好き」と小学一年おのこ  
女房の奨学金まで払うという少子化問題もと根深い  
うつつには奨学金を払えずに結婚などは夢とう若者

近藤栄昭 同級会

・虹

坂出裕子 鳥

・洛

青年の面影のこす喜寿の会名前確かむ二人はオムツ  
さし障りなき近況を少しずつ話す同級会新たな絆  
静やかに穏やかな声（次会また、また会おうよ）は柔らな別れ  
中心になりたい人は代わりなく同級会は引きずられゆく  
付き合いを閉じたいという同級生そういえばそう喜寿の集まり  
函館山麓の墓地の啄木に若きを思うもがいていた日  
同級会帰りの東北新幹線ひとりふたりと下りゆきひとり

若き日の家持たちし雨晴海岸 砂地のながくて磯わかめ干る  
暴り日の磯にありせば巖峰立山を雲のむかうに想ひ描けり  
能登守の冬は籠りて歌詠むと聞けば後なる家持の顕つ  
北溟のきびしからまし波頭 若き心を打ちなだめしや  
深海のかをりをふはり運びきてかき揚げのエビ舌にはもろき  
暴り日はくもり日のまま夕ぐれて海辺の町にうみかせの吹く  
家持が因幡にのこす終の歌「初春吉事」におもひめぐらす

閉ざされて閉ぢ込められて生くるがのコロナの闇のいつまで続く  
翌年の冬の寒さのコロナ禍は老いの身に沁む痛みにも似て  
明けぬ夜は無しとし聞けばコロナ禍の間もいつかは消ゆるならむが  
さざ波の光る波間に北国ゆ渡り来たりし鳥が憩へる  
長旅の疲れ愈やすとさざ波の光る波間に羽を休めて  
群れをなし憩へる鳥にやすらぎを得つつ歩める川べりの道  
川べりの道の散歩に山を見て空を眺めてこころやすらぐ

# 篠原まり子

雪の日

・羊

# 関根榮子

アルバム

・埼

雪が降る道に日敏くひよこ草摘みて小鳥の土産となさん  
友の賀状要介護告げ整わぬ文字は悲しも会う術も無く

仲間等と柚子湯に入るカピバラを羨しと思うひとりの柚子湯  
電飾は青く冷たく街路樹の何処へ移りし雀のお宿

半年は雪降り続く國に生れ雪の禍知らぬ幼日

あの国の歌も料理も好みしは咎なる事か父母に問う  
夕日没つるオレンジ色の水平線生きた証のひと日が消ゆる

# 柴田登志恵

暁月うすら

・天

明け前の南の空に月細く地震の忌日はしづかにはじまる

満月と天王星を蝕みし青き地球はいつも淋しき  
山法師の枝二つ三つ明らか冬のもみぢに日脚延びゆく

ラ・フランス熟するほどに傾きて地平の揺らぎ香りふくよか  
あたたかき休日の朝尉鶴人気なき街自在に飛びぬ

内海が大洋へ出づる水道に渡りの鳥は高度あげゆく  
一斉に海面から立つ百合鷗背に暁月うすらなりけり

# 鈴木結志

しだれざくら

・福

春攻めのさくら前線謳歌してその土地の風土記おりませてくる

いしづえは山紫水明郷の地にうた詠み起こし息をととのう  
山住みにあれば花も詫めく純粹なまでの花あふれ咲く

戸をくればまだ誰も見ぬ木戸ざくら心研げよのたまゆらの声  
色さゆるしだれざくらの七重八重うた詠みびとの心をひらく  
言盡のやどるやどるやしだれさくら花大地にとどき地のエキス吸う  
わが庭にさくらの宮をかもし咲く花の下にて酌む酒の味

# 高尾恭子

東急ハンズ

・大

整理する昔の写真あの頃は貴重なレザーパーティー張りのアルバム  
どうしても思い出せない人ありて写真に終る過去というもの  
しばらくは見つめておりぬ若き日の晴れやかな笑顔の私がいて  
忘れた草の名をひと口氣にせしが夕べに山荷葉をふと思い出す  
山査子とピラカンサの区別つかぬ人にわが盆栽の実で示したり  
早朝に鳥ら啄みし跡にして凍て土に真赤き万両の粒  
家居にも倦みたる夫が不自由な片足曳きつつ畑へ向かう

# 関根和美

水戸坂教会

・埼

武蔵より見るつくば嶺とうらはらの険しく入り組む北の辺をゆく  
ひとりゆく取材のはじめ六戸の地二十年経て訪う秋の日に  
さまがわりしたる駅まえ道順を問うに友部の修道院を知らず  
遙巡ののちにタクシー運転手「ああ、ここ水戸坂教会ですよ。」  
レブリカという舟越保武のダミアン神父像は苑にたたずむ  
友部より水戸への道は上り坂くだる六戸の地にマリア像  
彩色のマリア観音江戸期よりいまも守られ道の辺にたつ

しあわせになつた気分を封じこむ東急ハンズの大きな袋

肉厚の温かき手はまばろしと老舗ハンズのロゴを見上げぬ  
エプロンの似合う男がカッコいいモデルルームに灯りがともる  
スペイスの蘿苔ばかりが煮つまつたあなたの作る本格カレー  
絵に描いたような笑顔のニューフアーミリー陳腐な比喩がいまは切ない  
置きどころなき現し身を見つめたり27センチのビーチサンダル  
蘿苔をたれる主のなき居間にワイングラスの曲線ひかる

# 高津砂千子

女正月

・風

# 田土成彦

うちでしやまむ

・宙

荒れし地に伸び放題のピラカンサ枝ゆさゆさと朱実揺らせり  
ことことと炊くあすき粥ほっこりとこころあたたむ女正月  
コロナ禍もいとわず歩く見おろしの瀬戸の内海風ぎわたりたり  
牡蠣祭の会場で食ふカキフライあつあつゆえの弾ける美味さ  
「恩返しする力はまだ残ってる」国枝選手の引退の言  
紅色の小さきつぼみをあまたつけサボテンの花咲き始めたり  
起き上がり小法師に元氣与えられ凍てしるき日もウォーク休まず

# 滝田靖子

帰省

・新

「新しい戦前」タモリが笑まひつつ放ちしひと言じわじわと不気味  
三年振りに帰省のふたり何ごとも無かつたやうにただいまと言ふ  
賜ひたる賀状をしきりに正月をぽつりぱつりと本読んでゐる  
涙なきお別れなりき百歳に近き老婆は神のごとしも  
聞いたことないお経だねなどひそひそと読經の最中を不謹慎にわれら  
拾骨に声あげて泣くひとりにて喪失といふをまさざと知る  
それぞれの近況報告などをして通夜も葬儀も賑やかなりき

# 竹下妙子

春泥

・霧

一生を働かぬまま過ごしゆく働き蟻の居るといふ不思議  
鉛筆を鼻に挟んで五分ほど空から言葉が降りさうにない  
天王寺と阿倍野はどれほど遠ぶのか道路隔てたむかうとこち  
孫のゐない日の昼食はお茶漬けで路の蓋味増ぢりめん山椒  
救急車速く過ぎゆき深闇と無音の夜に消えてゆきたり  
コロナからは普通の風邪のやうになり人と暮らしてゆくつもりにや  
かつて言ひしうちでしやまむまたも言ふそれでよかつた過去があるのか

# 田土才恵

琵琶湖パレイ

・宙

足元に広がる雲海去りゆけば琵琶の湖かがやき始む  
振り向けば彼方の尾根へ上りゆくスキーリフトは冬支度して  
若者に囲まれながら自撮りして雲海の先に見えるは琵琶湖  
巡りゆく琵琶湖の湖畔白洲正子かつて暮らしたかの地遠見ゆ  
この秋のメタセコイアはいまだしの黄葉見せて雨にけぶれる  
時雨來て永楽寺の木々濡れそぼち紅葉の落ち葉色濃く染まる  
湖に親しみ生きる里人の鮎の甘露煮家庖にせん

# 玉井綾子

家族葬

・羊

新しきカレンダーめくれば菜種の花が一面に燃ゆ  
友の内に踏みに入るを避け語らへば互みの寂し君も独り身  
冬枯れの河原に来て何思ふ遠き彼岸の帰らぬ人  
秘むこと鍵しめ部屋を出づれば真澄の空の春の陽にあふ  
枯草にうもれて返り咲くつじ里山白き煙をまとふ  
オリオン座夜々澄む季節めぐり来て古き星図を書棚に探す  
わだかまり解れぬままに別れきて夜の粉雪背にとけゆく

## 中島央子

御節

森

背にさす陽のあたたか硝子越しむかし紙垂切る父の在りたり  
受けつきし黒うるし重に盛りつける里芋人参牛蒡の甘煮  
屠蘇散の香りたたしめ朱の盃に禍なきを込めてふふめり  
箱根路に競へる若きエネルギー画面の前に一日暮れたり  
会食を約せしままに三年間互に老いの回路がつまる  
風揚げの子ら追羽根の音もなき草の野原に残照とどく  
定めなき世に生まれたる曾孫の男の子は四千四百瓦

## 永塚節子

ピクセル

銀

あの人もこの人も罹患ひたひたと足音のばすコロナウイルス  
家こもる言い訳に寒さ風邪コロナ御託を並べ一日の暮れぬ  
これという事もあらずに日日暮らし新しき年はや一月の尽  
そちらからも見えますように一葉の節分草の写真を飾る  
固執するつもりあらねど作表の一ピクセルに行きつ戻りつ  
ピクセルにこだわり作る一覧表新年度には何の待つらん  
五分咲きのしら梅仰ぎ深呼吸ほんのひと時マスクはずして

## 仲西正子

綿の花

沖

押し入れの奥より出し広げたる真綿の布団また残し置く  
広げたる布団ふくらむ千の手の汗にて摘みし綿の花なる  
おぼろげに『アンクル・トムの小屋』浮かぶ真綿の布団広げしどきに  
実直なアンクル・トムなり働きて歌い折れど三度売られき  
籠の中を満たせぬ人に綿の花わけて鞭に打たれしトムは  
奴隸解放の機運となりし物語アンクル・トムは優しき男  
一枚の小さき布団に足を入れ我ら待ちしよ母の夜話

## 白子れい

教え子

洛

元日の早朝家いで諸羽神宮・毘沙門堂へのお詣ります  
朝のみち行きには見えずお詣りを済ませし帰路に霜の光れる  
かえりきて重組みの蓋とりあげて並ぶ料理にころの躍る  
四十年前の教え子とし年にお節料理を届けてくる  
夫逝きて独りの生活に重組みを作る氣失せしを知りし教え子  
ゆっくりと独り味わう節料理煮つけのうまさ心のぬくさ  
新しき年を迎えて新しき心抱きて今年も生きん

## ばばりようこ

あ、と

鹿

薩摩路の初雪令和の十二月十八日に降りし はなびらのよう  
うすぐもるなか陽はまろく透き雪の降る 南の今朝 雪の降る街  
玻璃越しにもみじ 白恋 老梅の 裸木にかかるばたん雪にしばし  
ボタン雪ひとつで終り、しんしんと凍める寒さをたっぷり残して  
ひと冬にいくたびの雪かと空よりの花ひらを心期しつつ あ、と  
北国にとりては煉獄の日々ならん大平楽の吾を疎みおり  
明と暗 弓なりの国を左右なすはさまに行き交う喜怒哀楽の妙

## 浜谷久子

冬の夜

地

七草の香りに満ちる新春の祈りは母より母は祖より  
軽やかに七草たたく音高く居座る邪氣の退散願い  
定めようない世に願うただ一つ家族の無事を月にも日にも  
児ら遠く住む日暮の到来にケーキを作り近くの友らへ  
デイズニーもU.S.J.も知らぬまませてと初のモスバーガーに  
モスバーガー体験果たし諸々の未知への興味の落着とする  
冬の夜の湯のひしひと 迫りくる震える声の声の裂れ裂れ

## 檜垣 美保子

雪

・昂

しゃらしゃらと鳴ることかわき揺れている梅樹の実と冬の青空  
 爪を噛む癖をやめたき十二歳マスクのうえにまたマスクして  
 きょうなぜか庭の枯木にカラスきて鳴かず一瞥投げて飛び去る  
 立ち枯れし背高泡立草の道長き尾を立て黒猫がゆく  
 雪つもる予感は窓のあかるさとしづけと頬に知るつめたさと  
 一面の雪の静寂夜明け前テールランプの赤き点滅  
 午後の日に椿の枝をしそる雪仏間の阿弥陀如来も見ており

## 福田 庸子

海龟

・今

海龟がビニール袋を喰む星は人も本物を知らずに生くを  
 我が生の源となる雪山の髪の深さよ光の奥に  
 冬されの乏しき水をせきとめてフルードーバーの首笛をまさぐる  
 国民の祝日變る時来るも私は黄ばみし昭和の国旗  
 あざやかな色の車体の輝きは孫ら寄り合ふ元旦の家  
 なめらかに刃先進むを朝採りの大根するりと薄き輪切りに  
 物資なき時代到来遠からず新年の朝の世界に見入る

## 藤田 美智子

&lt;前世バレ&gt;

・新

教室に入らぬ少女とのおしゃべりに「前世バレ」なる言葉を知りぬ  
 笑顔少なくなりたる君のセーターの胸に三匹のラッコが並ぶ  
 悪気なきゆゑに傷つけらること悪気なき人はきつとわからず  
 白鳥はしきりに翼を羽ばたかす地上に知らせたきことあるごとく  
 酒に弱くなりたる君はもう寝ねて月のなき夜に救はれてゐる  
 一年に一回きりの報道も多くは「前向く人」を取り上げ  
 健やかさを取り戻しめるやフクシマの大地に種蒔く季節近づく

## 藤森 巳行

ワクチン接種

・銀

八十四回の正月迎へる我なれど命のかぎり続く人生  
 吞んで食べ呑んでは眠る日を過ごし今年の正月過ぎてしまひぬ  
 過度の飲酒控へるやうにと書いてあるワクチン接種注意書無視する  
 ワクチンを接種した日も深酒し動悸が止まらず死ぬかと思つた  
 ワクチンを接種した日が悪かつた一月六日まだ松の内  
 ワクチンを甘く見たのがまづかつた注意に逆らふ接種に慣れて  
 体内に異物を入れる恐ろしさ今回知りぬワクチン接種

## 船田 清子

代はりゆく

・天

戦後すぐの府営住宅二十七軒代りしてなほ住む二軒  
 そのうちの空屋四軒ガレージと化して子供の声は失せたり  
 エアコンの音のみたつる午後に歌は成らざり花でもあらな  
 正月の花は松・梅・南天に赤白の菊、つたの葉添へて  
 生花なら松一本もおどろく値段めぐらす一案さうだ  
 東京ゆ帰り来たれる孫娘ママより手早き流しの立ち居  
 寒風にはや沈丁花の蕾つき春の香りをしのばせてゐる

## 牧田 雄彦

京の冬

愛宕山杉の木立に夕日差し聞くは風音はた神のこゑ  
 頂上の御社めさし雪残るきだはしを踏む膝をかばひて  
 残雪を踏みて辿れる山道に落ちし山茶花の花びらが燃ゆ  
 下りゆく急な山路に真直ぐ立つ大杉の幹を木枯らしが打つ  
 まなしたに京の街見ゆとぼくには姉の逝きにし白き病院  
 北山は雪降るらしも灰色にうつすらけぶりてゆふかたまけぬ  
 葉をすべて落とししさくらの並木道肩をすくめて京の冬をゆく

松浦禎子 里山へ

・羊

三木まり 煌

・昴

ろう梅の香り今しと足柄郡その山奥の風のたよりに  
足柄の山の尾根みち幾曲がり金太郎童子生れし里へ  
金太郎のよう両足ふんばって山上に梅を植えし人々  
「寄」とう地名をほこる山上にろう梅二万本黄金波うつ  
黄の色に朱の色まじわる色付きを美しとカメラでめぐる人あり  
山上より見下ろす村のたたずまい花よりなおも心充たしむ  
中津川の清流が育てし川魚鱈の串焼きにおう路次ゆく

松瀬トヨ子

クラスター

・沖

子といはう幾つになつても子のままで胸底の湖を泳ぎたゆたう  
みずうみを泳ぐ子を声の限り呼ぶ呼べと届かず遠さかりゆく  
子のなまえ呼べと虚しく如月の凍てる湖を風吹き渡る  
遠ざかる子の頭ひとつ浮き沈み白銀の二月 月煌々と  
如月の空の高みで風荒ぶあかときの空ただ澄み渡る  
桃源とはかくも遠い夢なのか真夜中、声にならぬ声上ぐ  
今朝は凪ぐ湖の色は深みどり春告草の香りは淡く

宮本靖彦

初詣で

・凌

シーサーのかたえに猫のまるまりて細か雨ふる冬至の寒々  
利用者の百名余と言うケアホームにコロナクラスター発生の渦  
いわれなき不安にかられ検査入院異常なしと翌日帰宅  
アクリル板一枚に仕切られコロナ病棟一般病棟ゆうやけの空  
帰宅してクロワッサンとコーヒーの朝食のうまさレタスしゃりしゃり  
梅が咲き桜が咲いてたっぷりと春が来ている歩道の並木  
おさまると思えど再び広がりぬコロナウイルスとウクライナ戦

二 浦好博

小鳥来る庭

・銚

三好聖三

わざおき

・伊

三代夫婦六名寄りての祝杯は孫むかし欲りしメロンソーダー  
厄神ゆ荒神様へと続け來し幾十年初詣で独り二年目  
拝む人賽錢投ぐる人押し合ひいつもの荒神にもどるは嬉し  
初詣で終へていつもの茶屋店へ「客回復よ」とおかみの笑顔  
沫雪に薄化粧せるさ家庭の椿一輪紅く燃え咲く  
六十路には好み歩みし能勢街道大寒の今日卒寿をためす  
この寒さ「温暖化の副作用」とか識者よブーチンの真似するなゆめ

落とされて首なきキヤベツの残り葉の葉脈露はに朝の日に照る  
本読みでそのまま炬燵に居眠れる仏のやうな我が顔であれ  
庭の木も次々伐りて老いの家最終活の準備をせしよ

遠方に富士の見ゆれど公園の冬の銀杏よ直立淋し

流星の一つ一つに子のごとく声あぐる二人未来確かか

友の家の千両万両大判も小判も喜び小鳥来る庭

ジェンダーに問題あらむ近頃はテレビ体操に水着姿無し

食パンは焼くというより温める程度が好み今もむかーしも  
草齶り・鍊をバケツに畑へゆく冬なお生える草を剥ぐため  
ときとして消えては点る容の七色仮面波島進  
ヒトラーって占い師なの先生と質問が飛ぶ六年二組  
悪人も博士の愛した数式もわざおき優る深津絵里君  
蛇じゃないながーい貨車をくねらせて臨海鉄道蒼き機関車  
筒状のつぐらに潜り眠りいる猫よそなたの尻尾が見える

## 御代田澄江 経年劣化

・茨

## 山下雅子 山茶花

・習

吾が骨の骨量減りて指輪ゆるみ右手に移しやうやう納まる

蓬髪となりたる姿を鏡に見今年最後の美容院へ行く

背な屈むを経年劣化を言へる医師となかなかそれを言はぬ吾が医師

日が翳るたちまち兆す不安かな鉢のシクラメン勢ひなくす

自衛隊機磁音残し基地へ帰る戦争準備は願ひ下げたし

救急隊員の活動切なりウクライナロシアの砲撃にアパート死者数多

中国とアラブ諸国の首脳会談いかにもアラブの大富豪の様相

## 茂木斌 梅一輪

・埼

コロナ禍を引きずりしまま年暮るるウクライナさらに戦のままに

スペゲティ症候群なる言葉知る重症患者のベッドに暮らす

コロナにはまだ体調を崩さねど年齢ゆゑの脚力くづす

戸越銀座に見つけし書店の明昭館『すばり池波正太郎』買ふ

初詣に戸越八幡詣でたり卯年の今年兔の石像に会ひに

落としたる龍角散のトローチが追ひかけこよと床を転々

房州に「梅一輪」の地酒あり新酒欲すれば売り切れと出づ

## もとむらしげと

母校

・そ

母校なる社の下の小学校初詣でののち妻と寄りたり

校庭に千人近くが並びいし朝礼いまは三百人と聞く

筆もち落ち葉を集めし岩石園いまは碑のみがしずかに建てり

鼓笛隊の小太鼓たく少女なりきいまは隣を歩く老女は

頼まれて煙草を買いに行きにけりわれは先生に愛されていし

朝礼で校長先生がいつも言いし「他人を大事にする子どもたれ

よき記憶多くありたる校庭に梅の木は主のごとく立つ

## 山野幸司 南瓜

・沖

オレンジの南瓜の種子を探る君がはやるトーンが電話に届く

君と時く秘密の南瓜地の中宝を隠す子どものよう

いやさるる南瓜の香テーブルに君と二人の夏よ恋しき

もう一度食べてみたいよあの南瓜絶食の中体が叫ぶ

汝が愛は南瓜のスーパーライオンのおやついただく風たおやかに

一粒の種子に始まる物語南瓜オレンジ君が手にのる

真夏陽に双手を捧げ南瓜立つ烟一面あふるる生氣

## 山本孟

わが団地

・大

わが団地棟と棟とのあひだより初日の光射し届きたり

九十歳無事に過ごして今日になりまた一歳より生きてゆくなり

この一步この一步と坂登り目的かなふまで足を鼓舞せり

窓開けて眺むる六甲山容は変はらず九十一歳の朝

山肌に雲影映し消えてゆくわれの姿をこの地に印す

この狭き家にもあるか神懸し無理して買ひしもの見あたらず

待ち合はせ旅立ち出迎へ帰宅するための空間 駅の空氣浴

養学登志子 新春

・凌

南天の五本ばかりを壺に活けお正月さまの依代とせむ  
こぼれたる赤き実集め外に置かば小鳥来るやも時どきに見つ

注文の鏡餅まだやわらかし「善哉でも」と餡の付き来て  
注連を売るなじみの媼のついに見えず福穂裏白山の香とぎれぬ

除夜詣挨拶をして過ぎしひとマスクを下げて振り向き「わ・た・し」  
新春の舞楽男松をそびらにし肅肅と舞う二の指そろえ

椀を包み箱の紐をむすぶとき少しさみしいことおさめとうは  
椀を包み箱の紐をむすぶとき少しさみしいことおさめとうは

横田敏子 一月の林

・福

ひと冬を耐えし裸木瑞々と芽吹く日を待つ二月の林

薄氷は淡くはかなく消えにけり 立春の空高く澄みゆき  
東風に乗り甘くほのかな蠟梅の香り流れ来こころ急かさる  
いち早く春を連れる蠟梅の淡き花びらしと光る  
モノトーンの林の中に蠟梅のおぼろ月夜のような明るさ  
冬木立めぐりて行けば万作のねじれて細き黄の花に会う  
春を待つ心と花を待つ心膨らませつ林を巡る

小林能子 檉

・羊

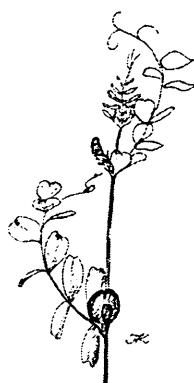
鏡餅のイラスト兎に断りてプラスチックの楓ほかす

スーパーに葉つき楓求めつつひと巡り通院の寄り道たのし

とりよせのお節に紅白なます添へ独りお屠蘇は除夜の汽笛待つ  
結い上げし髪 鮮やかな琉装の写真にひとこと「結婚しました」

雪のなか列なし水を汲む図絵のカードに里帰り叶はずとあり

移住するものあり起業するも在りわからぬといふ未来に懸けて  
わが団地文化に給食サービスありほかほか煮物の名人も居り



佐藤道子 救急車

・甲

救急車日毎ふえるを愁ひゐて自ら乗るとは思はざりしに  
隊員さんスマートにきばき宇宙人動けぬ私をさらりと運ぶ  
検査検査で長き刻過ぎ付添の息子の笑顔にほつとひと息  
コロナゆゑ面会謝絶の病院に運ばれてゆく今より孤独

退院後お薬効き過ぎ再入院脱水血圧上が六十

個室ならぬ四人部屋を希望する面会謝絶に何の意味ある  
血圧の高きを嘆く人低き吾ままならぬものこの世の中は

久我田鶴子 放課後

・羊

かはいさうなんかちやないと泣いてるき伏せし具体をはつか覗かせ  
なにゆゑにわれでありしか放課後を来て泣きゆきぬただ一度だけ  
話すだけ話して気がすむ、つてほどのことではなからう一時間をかけ  
こぼしたる涙、言の葉 やうやつて分けてくれしをわが忘れ得ぬ  
をさなさと無理におとなになりしとをこぼして見せぬ嘘もませつ  
押し倒されそのとき見たる太股のタトゥーを言ひき いや、言はざりし  
放課後に駆込訴といふありて憐れみは嫌と泣いてをりたり

## ワールドカップ

藤井 君康

無花果農家

一ミリを諦めなかつた三宮さんその信念が感動与う

## 今月の二人

兼六園雪吊り終わり冬を待つ空つきあげる幾何学模様  
 五回目のワクチン接種済ませたりまだウイルスに僕は負けない  
 久びさに旧友三人集まれば盛り上るのは病気の話  
 炊き立てのご飯があれば十分なりわが刈り取りし新米なれば  
 無花果の出荷時期には真夜中にあちこちの畑に螢火光る  
 午前二時空調服に袖通し猛暑に負けずイチジク収穫  
 暗闇にライトを浴びて光つてる完熟だけのイチジク挽ぎる  
 葉の落ちし無花果の枝剪定す寒風のなか感謝を込めて  
 亡き父の研究重ねし「桃太郎」いま孫により甦りたり  
 畦道に咲く曼珠沙華逆光の夕陽の中に亡母のまぼろし  
 寒空にライトアップの御堂筋わが心にも灯りのともる  
 三輪山の大神神社に祈りたる娘の手術が成功するよう

両親を順番に看取り、無花果農家も長男  
 が脱サラして農業がしたいと言つて跡を継  
 いでくれています。今は少し余裕が出来た  
 ので、妻と二人で吟行と称して色んな所へ  
 出かけ短歌を詠めたらと思つています。

私が五十七歳のとき母が認知症になつた  
 ので、毎月妻と二人で「物忘れ外来」に連  
 れていく為に早期退職をしました。そして  
 父から無花果農家を引継ぎました。勤めて  
 いる時から両親の仕事を手伝っていたので  
 無花果の栽培には自信があったのですが、  
 植え替えた木が順番に枯れていきました。  
 父は根元に土を置いたり水を掛けたり色々  
 と手入れをしていました。そうこうして  
 いるうちに体調を崩し、食欲不振や不眠症  
 に陥り、体重が十キロ位減りました。そし  
 て全身が痛くなる線維筋痛症という病気にな  
 りました。妻がネットで専門医を探して  
 くれて三年間程通院して回復しましたが、  
 物忘れがひどくなつていくようで心配にな  
 り、何か頭を使うことをしなければと考え  
 ていた時に、高校時代の恩師の藤澤元子先  
 生が短歌の会をやっておられると聞いて斑  
 鳩歌会に入れていただきました。

# 今月の二人

「さくら会」

畠澤 博子

七十の手習い

孫帰りひつそり閑のお茶の間に夫の言葉の少なくなりぬ  
子と孫の帰りし夜の食卓は残り物多く夫と向き合う  
新雪に声上げて身を躍らせる口数少なになりたる九歳

食器棚に母閉じこめし物何ならん戸も引き出しも重く軋めり  
陽だまりの椅子に小さく眠る母ネジを失くしたオモチャのように  
話すこと少なくなりたる母なれどまれにはわれの名前を呼べり  
今日もまた無事に目覚めて立つ厨朝の冷気を胸深く吸う  
教え子の訃報に思わず声を上ぐ若き日の我を励ましぐれき  
枝重く残されし柿点々と雪積む庭に明かりを灯す

土手沿いに柳はぐくみ山ぐみを実らせし川涸れたりと聞く  
始まりは百人一首ご近所の六人集い古典読み初む

その月のその夜限りの会なれば「おもしろかった」それで良しとす  
「さくら会」と命名せしはいつよりか敢えてうばとは付けずに今も

「短歌を始めてみませんか」と声を掛け  
て下さったのは、たまたま旅でご一緒に  
以来おつき合いのあった藤田美智子さんで  
した。後期高齢に近い年での新しいことへの  
挑戦に初めは怖ける気持ちがありました。  
もともと短歌は嫌いではなかつたのですが、  
詠むことには縁がありませんでした。しか  
し、年々スピード感を増して流れ去る日常  
やその時々の自分の思いにもう少しゆっく  
り向き合いたいと考えていた頃で、心が動  
きました。そして、母のことが頭に浮かび  
ました。子供の私が新しいことに一步踏み  
出すのをためらっていると、「人より上手  
やろうと思わなくていい、楽しんでやっ  
てみな」と背中を押してくれたものでした。  
自身も六十代の終わりに水泳を始めて九十  
二歳まで楽しみました。「何かを始めるの  
に遅過ぎることはない」と言われる気がし  
ました。すっかり老いてしまって、今は口  
数の少なくなってしまった母ですが。  
遅いスタートから二年、いまだに提出の  
〆切に追われ、楽しむには遠い現状です。  
それでも、日々の暮らしの小さな輝きや喜  
びに目が向き、ささいな日常が改めて愛お  
しく思えるのは間違いなく短歌のお蔭です。

## 午前二時空調服に袖通し

## 始まりは百人一首

評者：久我田鶴子

藤井さんは、大阪府羽曳野市に在住。早期退職して母の通院を助けるとともに、父から無花果農家を引き継いだと言う。

・炊き立てのご飯があれば十分なりわが刈り取りし新米なれば多くを望んではない。炊き立てのご飯があれば十分。そもそもそのはず、自ら刈り取った新米なのだから。素直に表現された充実感がまぶしい。

・午前二時空調服に袖通し猛暑に負けずイチジク収穫

イチジクの収穫は猛暑の中で行われる。早朝どころか、午前二時からの作業。しかも、そんな時間から空調服を着るという。これらの具体から、いかに大変な作業かが伝わってくる。

・暗闇にライトを浴びて光つてる完熟だけのイチジク抜きる夜明け前の作業は、ライトを点して行われる。ライトを浴びて光るイチジクの中から、完熟したもののだけを選んで収穫していくのである。「完熟だけのイチジク」では少し変。四句と結句を入れ替え「イチジク抜きの完熟だけを」ではないかが？

・葉の落ちし無花果の枝剪定す寒風のなか感謝を込めて無花果農家の冬場の作業は、枝の剪定である。これも寒風の中の大変な作業だが、作業の大変さよりも実りをもたらしてくれたものへの感謝が詠われている。

・亡き父の研究重ねし「桃太郎」いま孫により甦りたり

この「桃太郎」は、トマトだろうか。父が研究を重ねていたものを今、その孫が継いでいると言う。「孫」とあるのは作者の息子であるようなので、「いまわが息子の甦らする」とか、「いまわが息子が跡を継ぎいる」でしょうか？

島澤さんは、福島市在住。いつでも背中を押してくれた母の言葉が作歌を始める時にもきつかけを作ってくれたようだ。

・子と孫の帰りし夜の食卓は残り物多く夫と向き合う子や孫のためにたくさんのご馳走を振る舞つたことだろう。帰つてしまつた後の食卓に向き合う夫と「わたし」。祭りの後のような寂しさと充足感がただよう。

・食器棚に母閉じこめし物何なら戸も引き出しも重く軋めりはじめ「食器棚に母を閉じ込めた」と読んでビックリ。読み直してみると、食器棚に母が閉じ込めたのは何だろうと言うのでした。ここはやはり「母の」と助詞を入れたい。「母の閉じこめしは何ならん」でしょうか？

・話すこと少なくなりたる母なれどまれにはわれの名前を呼べり年をとつて、めっきり言葉の少なくなった母。そういう母だからこそいっそう、稀にでも自分の名前を呼んでもらえるのは嬉しくも有り難いことにちがいない。

・土手沿いに柳はぐくみ山ヶミを実らせし川涸れたりと聞く柳を育んだり山茱萸を実らせたと、いうこの川と、作者はどんな繋がりをもっているのだろう。あるいは生まれ育った故郷の川か？ 噂話のようにいま、その川が涸れたと聞いている。

・始まりは百人一首ご近所の六人集い古典読み初む百人一首から始まつた古典を読む会。「ご近所の六人集い」というところ、そんなご近所づきあいが今もあるのがなんとも嬉しい。どうやらこれが、タイトルの「おくる会」らしい。

私と短歌との出会いは私の母の助言でした。四十三、四歳の頃、私はいろいろなストレスを抱えひどく落ち込んでいました。

私が三十七歳の時、生まれつき病気を持っていた長男が十一歳で亡くなりました。長い闘病生活でしたので、その後の空白感は大きくなり、さらに次男をどう育てるかという大問題も加わって考え込んでいました。

人も、子供を亡くしたこと、仕事のこと、問題を抱えていて、一人で辛い生活をしていました。その時に母が、「短歌があるわよ」と言ってくれたのです。「気持を表現する短歌をあなたも学んでこらんなさい。」

と。母は当時、町田市の成人学級で学び、そのまま小さな短歌の結社に入っていました。「最初に道浦母都子さんの『無援の抒情』を読んでこらんなさい。」と言いました。私は読んでみて感激しました。『無援の抒情』は全共闘世代の心理や情念を歌つたものです。

私はそれまでは日記をよく書いていましたが、日頃の出来事やそこで感じたことを、自分の感性で五七五七にまとめることができ、表現することができるのだと思いました。短歌っていいなと思いました。

それから高野公彦編『現代の短歌』を買いました。私は最初は三ヶ島葭子、生方た

つゑ等に惹かれたと思います。三ヶ島葭子は現実の厳しい生活における自分の気持をそのまま詠ついて感動しました。宮松二・中城ふみ子・大西民子・石川不二子と、次々と好きになっていました。

自分でも短歌を詠んでみたり、NHK短歌教室に通い始めました。町田の実家の近くにあったからです。篠弘先生と富小

好きという思いは消えず、二年ぐらいして横浜市金沢区の主催する短歌教室に入りました。しかし短歌がとても厳しいかたでしたが、それまで私が通っていた短歌教室とは歌風がガラッと変った。先生は「歩道」の上原照男先生で、してはいけない」と言われました。歌の詠い方にもいろいろ流派というか違いがあるのだなどその時思いました。私はすっかり抑えるような歌風になりました。叙景の中

に自分の気持が表れていれば良いという感じです。

その後上原先生が亡くなられ、しばらく自分で学習会をしていましたが、ある日、朝井恭子先生がやつていらっしゃる短歌教室に入れていただきました。そこで遊びのびと友達を得たという感じです。そして六年ほど前に朝井先生に「地中海」に入るように言っていただきました。

今こうして短歌を勉強させていただけるのは、「地中海」の先生方、皆様のおかけです。一から短歌を学ばせていただきたいけれどそれから三年ぐらいして、私は今度は本格的な鬱に落ち込み、頭が動かなく

## 私と短歌との 出会い

酒井 治子

248

路禎子先生が、交代で教えてくださっていました。私は何もわからないのに無謀だったと思います。幼稚な歌を作つて行きましたが、先生はそのまま手を取り教えてくださいました。私の歌は「淡い」と言わされました。

なって、自分の気持を自由に述べることができなくなりました。それで短歌教室をやめ、しばらく家にいました。しかし短歌が好きという思いは消えず、二年ぐらいして横浜市金沢区の主催する短歌教室に入りました。しかし短歌がとても厳しいかたでしたが、それまで私が通っていた短歌教室とは歌風がガラッと変った。先生は「歩道」の上原照男先生で、してはいけない」と言われました。歌の詠い方にもいろいろ流派というか違いがあるのだなどその時思いました。私はすっかり抑えるような歌風になりました。叙景の中

に自分の気持が表れていれば良いという感じです。

その後上原先生が亡くなられ、しばらく自分で学習会をしていましたが、ある日、朝井恭子先生がやつていらっしゃる短歌教室に入れていただきました。そこで遊びのびと友達を得たという感じです。そして六年ほど前に朝井先生に「地中海」に入るように言っていただきました。

今こうして短歌を勉強させていただけるのは、「地中海」の先生方、皆様のおかけです。一から短歌を学ばせていただきたい